

## 第64回 大阪河崎リハビリテーション大学認知予備力研究センターセミナー

2026年1月22日(木)10時40分から12時40分、4階小講義室において第64回 CRRC セミナーがハイブリッド形式で開催された。大学院生も含め講義室に15名の参加があり、講演を挿みエーザイ株式会社から情報提供が行われた。

### 大学からの研究報告



理学療法学専攻 講師 畑中良太先生より、「発達性協調運動症児における運動技能、問題行動、親の育児ストレスへの支援に関する研究」と題してお話しいただいた。

[要旨] 発達性協調運動症 (Developmental Coordination Disorder: DCD) は、学齢期児において運動技能の獲得・遂行が著しく困難となり、日常生活や学業に影響を及ぼす神経発達症である。DCD 児は併存する注意欠如・多動症 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder: ADHD) や自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) に

より問題行動を呈しやすく、親の育児ストレスも高いことが報告されている。しかし、運動技能改善が育児ストレス軽減に直結するかは不明であり、日本では診断率が低く、支援体制も未整備である。本研究は、DCD 児に対する支援の有効性を検証するため、二つの研究を実施した。

第一に、DCD 傾向 (DCD trait) を有する7~10歳児5名を対象とした症例集積研究では、週1回・9週間の運動技能トレーニングを行い、運動技能 (Movement Assessment Battery for Children - Second Edition: MABC-2) と育児ストレス (Parenting Stress Index - Child domain: PSI-C) を評価した。結果、全児が部分的な運動技能改善を示したが、総合得点の改善は1名のみであり、育児ストレスは2家庭で軽減、3家庭で悪化した。運動技能改善は育児ストレス低減に必ずしも結びつかず、併存特性や問題行動が影響する可能性が示唆された。

第二に、DCD 疑いのある (probable Developmental Coordination Disorder: pDCD) 児童20名を対象としたランダム化比較試験では、週1回・8週間の遊びベースの運動トレーニングと親支援を組み合わせた包括的介入を実施した。結果、運動技能の有意改善は認められなかったが、介入群では問題行動 (Child Behavior Checklist: CBCL) と育児ストレス (PSI-C) が有意に低下し、大きな効果量を示した。親への肯定的なフィードバック指導や社会的スキル促進が心理社会的アウトカム改善に寄与したと考えられる。

以上より、DCD 児支援には運動技能トレーニングのみならず、問題行動への対応と親支援を統合した多面的アプローチが有効であることが示唆された。今後は、介入期間の延長、大規模 RCT、長期フォローアップを通じて、家族中心の包括的支援モデルの確立が求められる。

# 特別講演



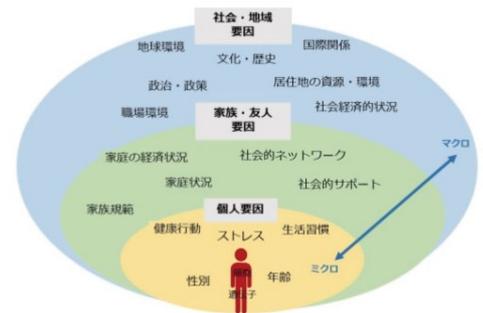
大阪医科薬科大学医学部 社会・行動科学教室 教授 本庄かおり先生より、「社会的健康決定要因（SDH）～社会的つながりと健康」と題してご講演いただいた。

[要旨] 社会的健康決定要因（Social Determinants of Health: SDH）モデル（図1）は、近年、医療分野において注目されている。個人の健康は、個人の生物学的特徴（性別、年齢、生物学的危険因子の有無など）のみで決定されるものではない。個人のライフスタイル、そして家族・友人などとのつながり、家庭や仕事に関する要因、また、居住する地域の資源等の物質的環境要因、そして、

人が属する社会の文化、制度、規範等の社会的環境要因が、多重に個人を取り囲み健康に影響を与えられている。個人の健康を診る際にも、人を取り巻くさまざまな社会要因が直接的・間接的に影響をしていることについて理解しておくことが重要である。

本セミナーでは、SDHのひとつである社会的ネットワーク（人のつながり）をとりあげ、その健康への影響を疫学研究結果を示しながら紹介した。これまでの先行研究は、大きい、強い、多様な社会的ネットワークを持つ人ほど、総じて、健康状態が良いという結果を示している。では、なぜ社会的ネットワークが健康に影響するのか？ この社会的ネットワークの健康影響メカニズムについて、①社会的サポート、②社会的影響による健康行動、③社会参加、④社会的役割を挙げ、疫学エビデンスを用いながら解説した。まず、社会的ネットワークは、社会的サポート（支援）授受の機会を増減する。社会的サポートは健康に影響を与える重要な要因の一つである。つまり、社会的ネットワークは社会的サポートの授受を介して健康に影響を与えられる。また、健康行動は家族・友人・知人などからの社会的影響を通して形成される。したがって、社会的ネットワークは社会的影響による健康行動を通して健康に影響すると考えられる。次に、社会的ネットワークが大きいあるいは強いと、コミュニティ活動などへの参加の機会が増える傾向にある。社会参加は、身体的・認知的・心理的・精神的な健康への効果が認められており、社会的ネットワークは社会参加の機会の増減を通して健康に影響すると考えられる。最後に人とつながることで生まれる社会的役割の恩恵の影響も考えられる。人は人とつながることで、社会的な役割を得る。社会的役割を持つことは、いきがいややりがいなどの増加につながり、健康に良い影響があることが報告されている。このように、人のつながり—社会的ネットワークという社会要因はさまざまな経路を介して健康に影響する。

図1 社会的健康決定要因モデル



出典：大阪医科薬科大学医学部社会・行動科学教室 HP

## 次回 CRRC セミナーのお知らせ

第65回 CRRC セミナーは、2026年2月26日（木曜日）10:40-12:40に開催予定です。群馬パース大学リハビリテーション学部 洞口 貴弘先生による「運動技能学習の異なる学習段階で運動に用いられる異なるタイプの記憶」と本学言語聴覚学専攻 専攻長 塚本能三教授による「毒を以って毒を制す - 使用行動をリハビリテーションに生かす -」及び論文紹介を予定しています。会場でもネットでも参加できますが、会場にご参集の方はお弁当準備の都合がありますので、事前に本学事務総務係 <soumu@kawasakigakuen.ac.jp> にお申し込みください。